「審査の結果の要旨」の概要

1. 課程・論文博士の別　　課程博士

2. 申請者氏名（ふりがな）　ガーヴィ、トーマス ウォルター
（Garvey, Thomas Walter）

3. 学位の種類　　博士（工学）

4. 学位記番号　　博士 第 5640 号

5. 学位授与年月日　　平成 16 年 1 月 22 日

6. 論文題目　　「Important Factors in the Effective Use of Small-scale Living Spaces: Japan as a Context of Study」
（日本における最小限生活空間の有効利用の研究）

7. 審査委員会委員　　(主査) 東京大学教授 長澤 泰
教授 大野秀敏
助教授 岸田省吾
助教授 西出和彦
助教授 千葉 学

8. 提出ファイルの仕様等　提出ファイル名　使用アプリケーション　OS
Word 2000　Win 98
文書名　ガーヴィ博士論文書類 doc
ガーヴィ博士論文要旨（日本語）doc
ガーヴィ博士論文要旨（英語）doc

専攻名:建築学

論文提出者:ガーヴィ、トーマス ウォルター

主査名:長澤 泰

論文題目:
「Important Factors in the Effective Use of Small-scale Living Spaces: Japan as a Context of Study」
(日本における最小限生活空間の有効利用の研究

別紙 2

審査結果の要旨

論文提出者氏名　　ガーヴィ、トーマス ウォルター

論文題目 「Important Factors in the Effective Use of Small-scale Living Spaces: Japan as a Context of Study」　　（日本における最小限生活空間の有効利用の研究）

この論文は、空間の知覚はかなりの部分主観的であるという前提に立ち、生活空間の主観的評価がどのように得られ、どのような要因がそれに結びつき、設計においてどのように空間の質の向上に貢献できるかを考察することを目的としている。

本論文は 6 章から構成される。

第1章では、研究の概要と目的,研究方法と論文の構成を述べている。

第2章では、既往研究の考察を行っている。基本となる理論をまず環境行動研究理論におき、「混雑」の概念を述べている。次に工業デザイン理論をもとにして、シナリオライティングの論理を解説している。

第3章では、日本を調査の対象にした理由、歴史的展望、そして現状の分析を行っている。

第4章では、理論体系を論じている。概要と言葉の定義、スケールの限界に対するデザイン上の対応、重要な要素についての考察である。

第5章では、実地調査の報告を行っている。ケーススタディの目的とタイプ、東京大学駒場国際ロッジでの調査を分析・考察している。

第6章では、考察と全体の結論をまとめている。

本論文は、デンマークという国（牢獄・クルミの殻）に閉じこめられたハムレット王子、10×15 フィートの小屋で「森の生活」をしたソロー、10 フィート四方の方丈を逃避先にした鴨長明を例に挙げることから始まっている。現代では宇宙船という地球外の最小限居住環境へ人類が移住すると同時に、地球上ではますます多くの人間が都市空間内の限定生活空間に移住していることに注目し、この二者を結びつけて、小規模生活空間への人間の反応を理解することにより未来の生活空間設計の変革を思考することを目的としている。

都市部への人口集中だけでなく、工業技術開発に成功して、高い生活水準を実現

している日本の住居を最小限空間の典型例として研究フィールドに選択している。

日本の小規模空間居住の諸条件を調べることを通して、まず環境とライフスタイルの関連についての知見を得、工業デザイン産物の家具・設備類などに注目している。密度が混み合いと高密度環境は低い生活の質と同義であるという見解と、小規模生活空間はライフスタイルに過大な制限を加え広い生活空間に劣るという見解における一般的誤解に疑問を見出して研究仮説としている。このようなライフスタイル・行動・デザイン研究は元来学際的で、環境行動研究の文脈としても本研究は位置づけられる。

本論文は理論考察的研究と調査実証的研究から構成され、前者では本研究が貢献可能な点を特定し後者では空間規模が活動とモノに及ぼす影響を論じている。

調査では、プロダクトと環境の変化、人間行動の両観点から20 ㎡以下の限定された生活空間の影響を明らかにすることを目的としている、例えば、「小型化」という操作は住宅や2階建て駐車装置、家具やプロダクトに至るまで夥しく存在していることを指摘し、空間とモノのサイズ（容積、面積）を、本を読む（小さな空間、小さなモノ）、風呂に入る（中くらいの空間、大きなモノ）というように、小・中・大に分類している。全てのアクティビティが専用空間を持てない場合は、混合いによるストレスが発生し、それへの折り合い行動が発生することを発見し、アクティビティの「小型化」「重複」「代替」「消去」の4種類の折り合い行動について述べている。次の調査では人間と行動に着目し、小規模生活空間用にデザインされたモノ、家具・設備がどのように使われるか（使われないか）を、東京大学駒場国際ロッジの 13 ㎡の個室の実測とそこに住む 20 カ国、41 人の外国人留学生に対してアンケートとインタビューにより調べている。その結果、部屋レイアウトと個々の家具・設備に関しては、大きさ（広さ）が常に満足度の最大要因であり、言語的記述を見ると、主に大きさ、次に無形の質、機能性、環境制御要因であり、定量化できる質を述べている言葉は他より3倍存在することを指摘している。つまり、満足度を決めるほとんどの要因は数量化できるとしている。

以上、本論文は理論考察研究では、デザイン理論が環境行動研究の理論と関連し、統合されうる領域を明らかにし、学際的な知見が得られる可能性を示している。調査実証研究では、小規模生活空間におけるモノがどのように空間の使われ方に影響し、どのように要求された行動が達成・制限されるかを考察している。以上から小規模生活空間の有効利用に関する理論的枠組みにおいて考慮すべき項目を明確に提示している。つまり、小さいことは必ずしも悪いことではない。ただし、そこによく住まうための他の条件が妨げられなければという条件つきであることを明らかにしたのである。

このように、本論文は今後、人口の増加と相対的に狭くなる居住環境における建築的な在り方について基本的な知見を示し、建築計画学の発展に大きな寄与をしたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。